The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 奥の細道ところどころ（四） |
| Author(s) | 小島, 吉雄 |
| Citation | 語文. 1952, 6, p. 42-48 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68407 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 奥の細道ところどころ（四）

小島吉雄

## 八、「奥の細道」中の俳句

奥の細道中の俳句には、その解釈上、古来問題のあるものが尠くない。今回はそのうちの二三の句について解説を試みようと思ふ。

まづ、須賀川での句、

風流のはじめや奥の田植うた

について述べる。この句についての古来の解釈上の見解は、「俳句研究」昭和十年八月号の「奥の細道綜合研究（四）」に潁原退蔵氏によって要領よく紹介せられてをり、また「芭蕉講座」第二巻俳句篇（中）にも加藤楸邨氏の同様な解説がある。大体はそれらの文章のとほりでよろしいのであるが、なほ一二附加したい点があるので、重ねてここで此の句をとりあげるわけである。

要するに、この句の解釈は、「風流」といふ語と「はじめ」といふ語とをどういふ意味に解釈するかによって、諸説が生ずるのであるが、「風流」については、これを謡物の名目とする説と、普通一般に使用する風流風雅といふ意味の場合すなはち「みやび」といふやうな意味に解する説との両説があり、また、「はじめ」についても、これを「濫觴」の意にとる説と、「最初」もしくは「第一歩」の意味にとる説との両説がある。つまり、これらの各説の組み合はせ方によって幾とほりもの解釈が生ずるのであるが、それらを要約すると次の三説に帰着する。第一は、奥州の田植歌は風流（みやび）の原初であるとする説であり、第二は奥州の田植歌はこのたびの旅の風流（みやび）の第一歩であるとする説であり、第三は奥の田植歌は謡物たる風流の濫觴であるといふ説である。そこで、この三説のいづれがよろしき解釈であるか、または、そのいづれもがよろしくない解釈であるかといふことが問題となるのであるが、結論的に言へば、第二の奥州の田植歌はこのたびの旅の風流の第一歩であるといふ説がよろしいのであって、このことは、今日では殆ど通説であって、諸家のひとしく賛成するところである。

おもふに、風流を謡物の名であるとする説は「菅菰抄」にはじまり、昭和六年七・八・九月にわたって雑誌「筑波」に連載せられた斎藤香村氏の説に至って完成するのであるが、いかにも鎌倉室町の時代には風流なる謡物が存在したことは事実であって、現代でもなほ地方にその遺風の伝はってゐるものがある。わたくしも、福岡県田川郡地方に今もなほ風流と称する謡物が遺存し、それには簡単な所作が伴なひ、祭礼の折などに演ぜられてゐるのを知ってゐる。しかし、この謡物の風流は、「ふりう」と呼ぶのが普通である。それから、ここに最も大切なことは、芭蕉が「風流」を謡物の意味に使ったかどうか、すなはち、芭蕉の意図

が那辺にあったかといふことである。芭蕉の用語例から言へば、風流を謡物の意に用ゐた例は、他に見出だせない。奥の細道の文中にも、この所のほかに風流といふ語が二個所出てくるが、いづれも一般的な用法であって、「みやび」の意に用ゐられてゐる。すなはち、仙台の加右衛門をほめて、「さればこそ風流のしれもの、その実をあらはす」と言ひ、また大石田の条に「このたびの風流ここに至れり」としるしてゐるのである。この二例だけでは、この俳句の「風流」を「みやび」の意にとるべき決め手にはならないかも知れないが、この二例は「風流のはじめ」の「風流」を「みやび」の意にとるべき類推材料にはなり得ると思ふのである。

ところで、この句は、これをその句形の上から演繹的に解釈するならば、右にあげた幾とほりもの解釈がいづれも成り立ち得るのであって、その点から言へば、実に表現の不完全な句だと言はねばならない。この句が表現の不完全な句だといふことは、既に荻原井泉水氏の「奥の細道評論」にも述べてゐるところであるが、そこで、この句の解釈をこの句の制作された場を理解することから帰納的に求めるといふ方法が採られ、芭蕉がこの句を作った時の気持から推して考へると、第二の解釈になるべきだといふので、現今ではこの第二の説が通説となってゐるのである。すなはち、この句は須賀川の等躬亭での挨拶の句たる性格を多分にそなへてゐる。その証拠には、曾良の俳諧書留にも「信夫摺」にも「等躬を訪ねて陽関を出て故人に逢ふやうな喜びを感ずる」といふ意味の、長い詞書がついてをり、そして、この句に和して等躬は「いちごを折ってわがまうけ草」といふ脇句をつけてゐる。言はば、芭蕉は本格的な奥州路にはひって最初の俳席を等躬亭で持ったのだ。そして、その喜びを田植歌に寄せて現はしたのであって、この田植歌こそ奥州路での風流の第一歩だといふのである。もちろん、芭蕉は奥州路の田植歌の歌ひた調子に心ひかれ、風流を感じてゐたのであったらうが、同時に等躬に対して奥州での最初の風流に会し得た喜びを謝する気持をもこの句に含ませてゐると見るべきである——と、かういふ風に解釈するのである。一体、この俳句は、大石田の条の「このたびの風流ここに至れり」といふ文と照応してゐるのである。奥の細道といふ一篇の紀行文にあって、文中の俳句の役割りといふものは非常に重要なのであって、その効果の上では文と句とは一体となって融和してゐるのであるから、今ここに句と文とが照応関係にあると言っても、決してをかしくはない。また、この紀行文を精読すれば、芭蕉がいかにこの一篇の行文の上に深い心づかひをし、修辞技巧の上にも留意してゐるかといふことが直ぐわかるのであるから、右の文と句とが互に照応してゐるといふ見方は、むしろ芭蕉の表現意図の真実にちかいのであると言へるだらう。元来、大石田の条の「このたびの風流ここに至れり」といふ文の意味については、「このたびの旅の風流が、こんなことにまで立ち至った」といふ解釈と、「今度の旅行に於ける風流は、ここに於てその頂点に達した」といふ解釈との二説があるのであるが、「至る」といふ語の本来の語義からいふと、「頂点に達した」と解釈する方がよろしいのであって、従ってこの頂点に達する過程に於ては、風流の第一歩といふものが当然あるべき筈であり、その点に注意して、大石田より以前に芭蕉は風流の第一歩を筆にしてゐ

るかどうかを検討してみると、われわれは、この「風流のはじめや」の句を発見するのである。すなはち、「このたびの風流ここに至れり」と「風流のはじめや奥の田植歌」とは、対応し照応してゐるのである。この両者が照応してゐるといふことは、森修氏校訂の「おくの細道」の頭注にも指摘してゐるところであるが、この両者が相照応するものとすれば、この俳句に於ける「風流」と「このたびの風流」の「風流」とは同内容のものであるべく、また「はじめ」は「のち」とか「最後」とかいふ語に対応する意味のもので「最初」とか「第一歩」とかいふ意味でなければならない。わたくしは、この行文上の照応といふ面から見てゆくと、この須賀川での俳句の解釈は一つに決定づけられるものと思ふのであって、「奥の田植歌は奥州路に於ける風流の第一歩である」といふ解釈は動かないものに考へられるのである。

奥の細道には、かういふ風にその文章との双関関係に於て見るとき、その句意を明らかにし得る俳句がすくなくない。たとへば、今の須賀川での句の少し前のところに芦野の清水の柳を詠んだ句があるが、これなどもその文との関連に於てその句意を明確に把握し得る一例である。

田一枚植ゑて立ちさる柳かな

この句も、やはり表現の不完全な句であって、普通に解釈すれば、作者が田を植ゑて立ち去るが如き意味にとれるけれども、それではこの句情が生きて来ないから、それでこの句の解釈については、いろいろと説があるわけであるが、結局、これについては古来両説があり、その一は「植ゑて立ちさる」を一つの連語と見て、その主語を田植ゑの早少女であるとする説で、他は、「植ゑて」の主語を早少女、「立ちさる」の主語を作者と見る説である。さて、このいづれの説がよろしきか。第一説は、同一文にあって二つの異なる主語をもつといふことは国文法上不合理であるから、文法的妥当性を重んじてかういふ解釈を下したわけであるが、しかし、ここは、前文に「今日この柳の蔭にこそ立ちより侍りつれ」とあるのを受けて、その前文の余意をこの一句にこめてゐるのであるから、「立ちさる」の主語は作者自身であると見るべきである。従って、植ゑるのは田植女たちと見なければならない。蓋し、ここでも「立ちよる」と「立ちさる」とは相照応してゐるのである。照応してゐるから「立ちさる」主人公と「立ちよる」主人公とが同一人であらねばならぬといふ理りが生じてくるのである。芭蕉はその文にも句にもこの対句的照応を盛んに用ゐたものであって、かの白河の関越えの条にも、「秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれなり」などと記してゐて、秋風、紅葉、青葉と、対句的に重ね、そして、「卯の花の白妙に」と受けて来たところなど、実に照応の妙を極めてゐる。

次に、また、平泉の光堂をよんだ俳句、

五月雨のふり残してや光堂

これも、その解釈に両説があるのだが、これについては、昭和二十二年一月号の「文学」に臼井吉見氏の評論があって、その解釈は、「幾春秋を経て、年々の五月雨にも朽ちず、光堂は燦然として今日まで残り伝はってゐる」といふのに治定してゐる。その理由は、やはり、その前文に、「四面新に囲みていらかを覆うて風雨を凌ぐ、暫時千載の記念とはなれり」とある意を受けて、句が成立してゐると見るからである。曾良の日記によれば当時は雨が降ってゐなかっ

たし、この句の初案がまた「五月雨や年年降て五百たび」といふのであったらしいこと等が、傍証とせられる。

総じて、奥の細道中の俳句の解釈に当って、その句の初案が参考になる場合がすくなくない。いまの「光堂」の句の場合もその一例であるが、たとへば、日光での

あらたふと青葉若葉の日の光

の句も、初案の

あなたふと木の下暗も日の光

を参照すれば、その句の真意が一層明瞭になるし、酒田での

暑き日を海に入れたり最上川

の句にしても、初案の「涼しさや海に入たる最上川」を参照すると、この句の余意が涼しさにあるといふやうなことが判るのである。

それから、また奥の細道の俳句を解釈する場合には、その本文との関聯に於て解釈してゆかなければならない。そのことは、今まで述べて来たところに既にわたくしの実行してゐるところであるが、この前文の如何によって、句意の異なることが、しばしばあり得るのであって、たとへば、小松での、

しをらしき名や小松吹く萩薄

といふ句の前文が、奥の細道では、

「小松といふ所にて」

とあるだけであるが、「雪丸げ」には、

「北国行脚の時いづれの野にや侍りけん、あつさぞまさるとよみ侍りしなでしこの花さへ盛り過ぎ行く頃、萩薄に風のわたりしを力に、旅愁をなぐさめ侍りて、」

といふ長い前文がある。芭蕉の真蹟の方では、この文の末尾が「なぐさめ侍るとて」となってゐるが、いづれにしても、この前文に従ふ時は、「しをらしき名や」の句は実情実感の句であって、「小松」を地名に引きかけてゐるとは必ずしも見なくてもよろしいのである。けれども、奥の細道の文のやうに、ただ「小松といふ所にて」とあるだけだと、この句は、「小松」に、地名を引きかけて、小松といふ土地を讃美する意をこの句に寓してゐると見なければならない。かういふ風に、前書きの内容によって、その句の意味内容に変化を来すことがあるのであるから、奥の細道の中の句の解釈に当っては、奥の細道の本文に即した解釈をしなければならない。といふのは、句と文とが一体となって、この一篇の紀行文を構成してゐるのだからである。

次に、前回の「奥の細道ところどころ」で、

荒海や佐渡に横たふ天の川

を事実に即しない虚構の句だといふことを言ったから、それについて少しばかり管見を披瀝して、この句を解釈する上に参考すべきことどもを申し述べよう。

「荒海や」の句は、芭蕉に「銀河の序」のあることやら、句集類に出てゐる此の句の前書きに「出雲崎にて」とあることなどからして、従来はこの句は出雲崎での作だといふことになってゐたのであって、そのため、

文月や六日も常の夜には似ず

といふ直江津での作より後に置かれたことは、芭蕉の意識した逆置であるといふやうな意見が、志田義秀氏等から出で、志田氏のこの意見は、その著「奥の細道・芭蕉・蕪村」及び「芭蕉展望」に詳しく述べられてゐる。しかし、この句が出雲崎での制作でなくして、直江津もしくは高田での作であるべきことは、昭和二十二年五月九州大学国文学会で発表し、そののち、その要旨

に従って昭和二十四年十二月九州大学文学部内九州文学会発行の「文学研究」第三十八輯に委しくわたくしの論証しておいたところである。志田氏も、その後、昭和二十三年の「新註奥の細道評釈」では、その説を緩和せられて、「奥の細道にあっては、両句の関係が逆に置かれたものとも定められないのであって、その順序のままに、荒海やの句を七夕の天の河を句にしたものと解すべきである」と言はれた。けれども、勝峯晋風氏の「奥の細道創見」のやうに、今もなほ八月四日出雲崎での作とする説もあるのであるから、もう一度この句が、なぜ八月四日の作でないかを大略申し述べる必要があるかと思ふ。

「荒海や」の句を出雲崎での作とする第一の理由は、芭蕉に「銀河の序」があるからである。「銀河の序」は明らかにこの句が出雲崎での作であることを物語ってゐる。しかし、わたくしは、句の方が先に出来、序はあとから書き添へたものであろうと考へる。芭蕉の書いたものには、句と文が同時に成る場合と同時に成らない場合とがある。これを奥の細道の中に例をとって言はば、さきほど挙げた、「しをらしき名や小松吹く萩薄」の句と「北国行脚の時いづれの野にや侍りけん」の文とは、同時に成らなかった一例であり、文字摺石の文や笠島の句の詞書等は同時に成った例である。「銀河の序」は小松の句の詞書の場合と同じく句と文とが別の時に作られたのであり、文はむしろ後から添加せられたものであらう。しかも、「銀河の序」には幾種類もの文形があり、その相互間に内容上の矛盾撞着がある。文字摺石の文や笠島の句の詞書にも文形に幾種類かあって、その文面に少しづつの相違があるのであるが、「銀河の序」のやうに矛盾撞着する記事がない。「銀河の序」の場合は、一方では「浪の音高からず」とあって他方では「波の音しばしば運びて」とか「波の音とうとうとものすごかりければ」などと書いてゐる。かういふ記事の矛盾は、「銀河の序」が事実から遊離した、作者の観念的な作文であったことを物語るのであって、文字摺石の文などは、比較的忠実に事実どほりを記してゐるから、何度書きかへても事実の上に矛盾撞着を生じないのであらう。それに、芭蕉は、天の川の佐渡へ横たはるのを出雲崎では見てゐないのであるから、「荒海や」の句は想像の句である。その想像の句を効果的にするために、詞書を添加し、しかもその詞書をいろいろに変改して工夫を凝らしたのではないかと思ふ。だから、この銀河の序には、よほど作為的なところがあり、事実に忠実でない部分もある。よって、この文章を証拠として「荒海や」の句を出雲崎での作だと断定することは避けらるべきである。

だが、「荒海や」の句を出雲崎での作だとするのは、銀河の序だけではない。「勧進牒」や「泊船集」や「雪丸げ」にもまた出雲崎での作となってゐる。「泊船集」は芭蕉の句文集であるが、その記事には信の置けない部分もあることは周知のことであるから、これは今は問題とするに及ぶまい。「雪丸げ」は曾良の記録をもとにして、曾良の甥の周徳が編んだものだといふから、一往は資料としての確実性を認めてよいものであろうが、しかし、この書の性質は、必ずしも曾良の記録にのみ従ってゐるやうではなく、曾良の記録をもととして、更にそれ以外の材料――たとへば、奥の細道の文とか、芭蕉の真蹟とかを以て、その不備を補ひ、より完全なものに改編しようと努めてゐる。従って、「雪丸げ」は句の排列

も必ずしも制作順にはなってゐない。また、この書に載ってゐる「荒海や」の句の詞書は、真蹟の銀河の序の前半を抜抄したものであるから、編者は、多分真蹟の銀河の序にもとづいてこの詞書を附し、以て曾良の記録の不備を是正しようとしたものと思はれ、しかもその詞書の内容に従ってこの句を出雲崎での句と判定し、直江律の句よりも前に載せたものであらう。元来が銀河の序にもとづいてゐるのであるから、これを以て「荒海や」の句を出雲崎での作だとする確証とはしがたいと思ふのである。また、志田義秀博士は、嵐雪の「其袋」の記事を引き合ひに出してをられるが、「其袋」の記事には、ところどころ誤記もあるし、正確を期しがたいものである上に、「荒海や」の句は「文月や」の句ののちに記されてゐて、その点では奥の細道と一致してゐる。曾良の俳諧書留には、「荒海や」の句は、越後高田の細川春庵亭での歌仙の次に「七夕」と題して載せらてゐる。

曾良の俳諧書留は、芭蕉に随行中に制作せられた句を制作時の順に書きとめてゐるものであるが、それらは毎日毎日その場その時に書き留められたものではなく、俳友の宅に草鞋をぬいで打ちくつろいで、幾日かをそこで逗留したやうな折々に筆を執ったものらしいのであって、その逗留中の句はもちろん、時にはそれまでの途中吟をも併せしるすといふ体裁になってゐる。そして、忠実に制作順に記載しようとする意図を示してゐることは、湯殿山の句のところに、わざわざ「三日月や」の句をあとから書き入てゐるのによっても明らかである。それから考へると、「荒海や」の句は高田の細川春庵亭での句のあとにしるされてゐるから、この句は、高田で書きしるされたと考へるのが妥当である。但し、高田で書きとめたから高田での作だとは断定すべきではない。すでにそれより先きに出来てゐたのを高田で書きとめたのだとも言へる。しかし、これがもし出雲崎で出来てゐたものならば、直江津での句の前にか、然らずんば、その直後にか、そのどちらかに書かれるべきであって、さういふ場合に春庵亭での句のあとにしるされるといふことは、この書留の記載例から見てあり得べきことではない。そこでその書留を信ずる限りに於ては、「荒海や」の句は、高田でか、もしくは直江津から高田への途中でかの作だといふ推定に帰着してくるのである。芭蕉は、七月六日七日の両日を直江津で過し、八日に高田へ到ったのであるから、書留がこの句に「七夕」と題したのも、右の推定に適合するのである。なほ、また注意すべきは、奥の細道の北陸路の記事では、さきにあげた「しをらしき名や」の句にしても、「あかあかと日はつれなくも秋の風」にしても、伝へられる長文の詞書によらないで、ただ制作地だけを示してゐる。そして、どちらかといふと、さういふ詞書の添加せられない前の原形――曾良の俳諧書留にしるしとどめられたのと同じ形で奥の細道に入れられてゐる。それから類推しても、「荒海や」の句は、銀河の序以前の形で奥の細道に入れられてゐると見るべきで、すなはち、曾良の俳諧書留にしるしてゐるやうな形に於て、「七夕」の句として、「文月や」の句より後に作られたものとして奥の細道に入れられてゐるのである。そして、それが、この句の実際上の製作時と発想とに忠実なのであらうと推察せられる。

但し、路通の「勧進牒」には、この句が「出雲崎にて」といふ前書きで載せられてゐる。これによれば、この句はやはり出雲

崎で作られたもののやうである。路通は奥の細道の旅の芭蕉を敦賀に出迎へて大垣まで同行した人であり、この集は彼が知人から俳諧の勧進を受けて編集したもので元録四年に成ったものである。されば、いまこの集に「出雲崎にて」としるされてゐることは、その集の性格なり、その撰者なりから考へて、これを無下に退けられない。すると、「荒海や」の句は、この集の記事に従へば、出雲崎での作といふことになる。もし銀河の序がこの路通の集よりも前に出来てゐたのであったら、路通はその序によってこの句の詞書をしるしたと推定することも出来ようが、今のわたくしには銀河の序の制作年時がわからないのである。従って、おもはれることは、この句が元禄四年頃には一部の人々に出雲崎での吟だとして言ひ伝へられてをつたのでもあらうか、或はまた、芭蕉が路通に出雲崎での作としてこの句を与へたのでもあらうか。これは、さきに曾良の書留から推定したことと食ひちがってくるのである。

しかし、いづれにせよ、奥の細道でのこの句の置かれた位置は、「文月や」の句のあとであり、「七夕」の句としてである。だから、この句を奥の細道の中の句として解釈する限りに於ては、七夕の句として理解し、天の川を通して芭蕉の旅愁を佐渡へ投影してゐるものと解釈すべきである。

なほ、この句の制作については、結論としては、わたくしは次のやうに考へてゐる。すなはち、この「荒海や」の句を出雲崎での作だとする積極的根拠に乏しい。これは、むしろ曾良の俳諧書留の記載に従って、直江津内至高田での作だと考へるべきである。しかし、この句の趣向はすでに出雲崎で成ったか、また、のちに構想せられたとしても出雲崎でのものとして構想せられてゐる。そこで、芭蕉は、さういふ句境を生かすために銀河の序を執筆してゐるのであり、また門下の句集にも出雲崎での吟として伝へられることになったのであらう。しかし、芭蕉の構想が成熟して句になり、それを初めて側近の曾良にもらしたのは、直江津から高田へゆく途中、もしくは高田でのことであって、その時は七夕の句として発表したのであらう。奥の細道では、この最初の発表の時の心持ちをいたはったのである。

わたくしは、「荒海や」の句に対して以上のやうに考へてゐる。そして、かういふ考へに従って、この句を解釈しようと思ふのである。従って、この句を出雲崎から佐渡を眺めたものとして構想したものだとすれば、これは虚構の句となる道理である。すなはち、芭蕉は出雲崎では天の川が佐渡へ横たはるのを見てゐないのであり、また出雲崎での旅泊は七月四日であったのである。

杉浦正一郎氏編むところの「校註奥の細道」の頭注には、曾良の日記にもとづいて、「出雲崎の印象を七日の日に作句したのであらう」としるされてゐる。また、土橋寛氏の「奥の細道評解」にも、曾良の書留と「菅菰抄」の註とによって、「この句が成立したのは直江津か高田に滞在してゐた時と考へるべきであらう」としるされてゐる。わたくしのやうな考へをもつ人が次第に多くなってくるやうである。

――大阪大学教授――